なぜ「東アジア時代」か

―― 西欧民主主義を救う「王道思想」――

外交評論家
井上茂信

1．共産主義にも資本主義にも希望はない

ノーベル文学賞受賞作家であり、現代ロシアが生んだ最も偉大な思想家の一人であるアレキサンダー・ソルジェニーツィン氏が、82年10月、日本のラジオ局の招きで、訪日した。1975年にアメリカに赴任して以来の、同氏の初の海外旅行である。その時、訪問先としてなぜ、日本ならびに中華民国を選んだのかが話題となった。またソルジェニーツィン氏は日本到着直後、ジャーナリストたちを撒いて数週間〝行方不明〟となり話題となった。あとで分かったことは、この間、同氏は日本の田舎を見たいというわけで、地方に旅行していた。なぜ、ソルジェニーツイン氏は東アジア特に日本の田舎に関心を抱いたのだろうか。

あとで、ソルジェニーツィン氏自身が語ったところによると、同氏は、共産主義と同様に、現在の西欧民主主義にも失望しており、新しい希望を東アジア、それも西欧文化に〝汚染〟されていない東アジアの地方に求めようとしており、このため日本の田舎を訪れたのだと言う。

現にソルジェニーツィン氏は、同年10月17日付の読売新聞の座談会「東西

文明崩壊の危機」の中で、次にように述べている。

「世界中で今国家も人民も体制も皆、道徳的に立派なものを欠いていると思う。人類全体が病気にかかっている状態だ。ソ連とアメリカという両体制の中で、崩壊という共通の事態が生じている。家庭の崩壊、労働意欲の喪失、教育の悪化などだ。相異なる両体制がいずれも、〝宗教なきヒューマニズム〟を出発点にしているからだ。われわれが完全かつ至高のものを持たない限り、共産主義の脅威がなくても、やがて世界は崩壊するだろう。」

文鮮明師は1984年６月26日の米上院司法委員会憲法小委員会での「宗教の自由」に関する公聴会に提出した声明文の中の結論の部分で、次のように述べている。

「世界の半分が、今や共産主義全体主義体制下にあります。一方、自由世界も神から離れ、自己中心と無神論的な人本主義に向かう危険性をはらんでいます。唯物主義的共産主義世界は、人類に何の希望も与えません。しかし、自由世界も神なしでは人類に何の希望をも与えることはできないのです。実際、私は、共産主義に反対するのと同様、神なしの資本主義は何の価値もないことを強く認識しています。（中略）無神論を基礎とする共産主義世界は、人類の夢の成就に失敗しました。一方、自由世界は、物質主義を至上とし、神を忘れ、世界的危機に直面して、役立たずになっています。世界は混乱し、真っ暗です。今こそ、新しいビジョン、新しい神を中心とした、世界観が現れなければなりません。私は、神の心情を基礎とする世界観を教えています。これが神主義です。この教えが世界に新しい解決をもたらすと、私は宣言します。」

何とソルジェニーツィン氏の前記の発言と似かよっていることだろうか。だが、最大の相違は文鮮明師が、世界の新しい解決をもたらすものとして「神主義」を打ち出していることである。すなわち、宇宙の究極原因としての神の「愛の心情」を基礎に、神を中心とした愛ある犠牲的関係を唱道している。これに対し、ソルジェニーツィン氏は、日本の地方に残っている家族主義や自己抑制といった健全な東洋の伝統文化の中に、崩壊しつつある現代文明の救済のカギを見いだそうとしているように思える。

2．「第三の波」と「新しい地中海文明」の誕生

20世紀はあと15年で終わる。ソルジェニーツィン氏だけでなく、多くの欧米知識人が東洋への期待感を述べていることは周知の事実である。最近では、フランスの哲学者E・モラン氏などは、米国西海岸、日本、香港、そして将来は多分中国をも含めて、北太平洋地域に新文明の巨大な震央地域が形成されつつあるとしている。同氏はこれを「新しい地中海」の誕生と呼び、「旧地中海人間として、私はこの事実を深く注目している」と述べている。どうやら20世紀の100年は、世界の中心としての欧米文化の終焉と、東アジア時代の幕開けへの道のりを指し示したものかも知れない。

ところで、政治、経済的側面はどうだろうか。この点でも欧米の東アジアを見る目が80年代に入るとともに急速に変わってきた。フランスの有力週刊誌「レクスプレス」(84年4月）は、世界の新しい中心としての「太平洋の挑戦」についての特集を行った。先端技術などで目覚ましい発展を見せる日本、韓国、さらに伝統的な大国・中国を擁する太平洋に世界の重心が移りつつあるのではないかとの危惧を述べたものである。

米国の社会学者アルビン・トフラーは、その著『第三の波』の中で情報大衆化時代の到来を述べた。世界を動かす中枢神経が、これまでの鉄、石炭、鉄道、石油だったのが、コンピューター、コミュニケーション、ジェット機時代になった。こうして、かつて交通の障害だった太平洋の広さが、発展への有利な条件に変わった。太平洋地域特に東アジアは「第三の波」に理想的な地域である。太平洋の大海原（うなばら）は「地球規模での地中海」になった。そして東アジアは固有の伝統文化に深く根ざしながら、世界中から最良のものを吸収して、多様性の中から最良のものを引き出している。これが「レクスプレス」誌の強調するところである。

米国のマスコミも同様に東アジアに注目している。「フォーリン・ポリシー」誌（84年冬季号）は、世界経済の中心が環大西洋から環太平洋に移りつつあるとして、「環太平洋時代の幕開け」と題する特集を行った。「US

ニューズ・アンド・ワールド・リポート」誌（84年8月24日号）は、日本がその端を開いた環太平洋諸国の奇跡的な経済発展は、今や韓国、台湾、香港、シンガポールにまで波及しており、韓国からニュージーランドまで、太平洋を弧状にとりまく環太平洋地域へと、米外交の焦点が移りつつあることを強調している。

また「ファー・イースタン・エコノミック・レビュー」誌（香港）（84年7月14日号）は「太平洋時代＝レーガン・中曽根の共栄案」と題する論文の中で「ホワイトハウスは、日米関係を単なる太平洋のカギとしてではなく、21世紀のカギと考えている。貿易紛争の陰で、基本的な補完経済が最先端技術の分野で進行しつつあり、日本の高貯蓄経済は世界で唯一の余剰資本のプールだと米側は考えている」と述べている。

3．米政府のアジア政策の静かな革命

次に米政府および米政府関係者の見方はどうだろうか。レーガン大統領は83年11月の訪日の途中、アラスカでの演説で「太平洋時代」との言葉を用い、東アジア重視の姿勢を明らかにした。次いで、同大統領は84年4月6日のジョージタウン大学国際研究センターでの演説で「太平洋時代」の意味を明確にし、その一つとして、現在の米国の太平洋貿易が大西洋貿易を上回っている事実に注意を換起した。さらに同大統領は「米国と太平洋諸国は将来性のある国家群である」と述べ、特に米国と日韓両国との提携の重要性を強調した。

次に注目されるのは、83年3月5日サンフランシスコでの「世界問題評議会」でのシュルツ国務長官の演説である。同演説は国務長官就任以後初めての同長官の総括的なアジア政策を述べたものである。しかも、その内容は、ニクソン、キッシンジャー外交以来特に顕著となった「米中ソ三極関係」という従来の国際情勢認識の否定の上に立ったレーガン政権の新しいアジア観を述べたものであった。その点から「米政府のアジア政策の静かな革命」と批評されている。

同演説は「アジア政策で米国が学びとるべき貴重な教訓」として、①アジア地域をこれまでのように一地域としてではなく、全世界的な視点から眺める必要がある、②大きな多様性にもかかわらず、太平洋地域で利害を一にする共同社会が成長しつつある、③アジア地域の将来にとり経済的、政治的自由の拡大が不可欠の重要性を持っている、④米国はアジア地域でユニークで決定的な役割を果たすべきである――の諸点を列挙している。

「グローバルな視点からアジア地域を眺める必要性」に関連して、シュルツ演説は①アジア経済の持続的成長が世界的波及効果を持っており、特に米・欧の蘇生に不可欠であること②アジアの海上交通路と資源が、インド洋、東アフリカ、中東の防衛に決定的に重要であること③日本が自由貿易の維持や戦略援助で重要な責任を果たしつつあることなどを強調している。

次に「太平洋地域での共同社会の成長」について、シュルツ演説は、ASEAN（東南アジア諸国連合）の国々、韓国などの自由諸国が、その経済成長で世界をリードし、世界で〝新しい重み〟を持つようになったことを強調している。またシュルツ演説は「これらの諸国は、その多様性にもかかわらず、開かれた世界経済への共通の必要性や、ソ連、ベトナム、北朝鮮による軍事脅威についての共通の認識から、相互間で協力関係を高めつつある」と指摘し、自由擁護と反共を中心とする地域結束の動きを評価している。

シュルツ演説は日本については、中曽根首相の韓国訪問、市場開放の努力、防衛責任分担の公約などを評価している。

次いで「経済的、政治的自由の拡大」について、シュルツ演説は「太平洋地域の経済成長は、自由市場の有効性を示した」と指摘するとともに、経済的、政治的自由が安全保障の基礎となることを強調している。

4．米、中、ソ三極構造観より経済ダイナミズム重視へ

最後の「米国のユニークな役割」について、シュルツ演説は太平洋国家としての米国の責任を強調するとともに、米国が今後目指すべき方向として、

アジア・太平洋諸国がより大きな責任を担うように激励し、これら諸国の力と米国の力とを有機的に結び付け、同地域の平和と繁栄を維持することが必要である、と強調している。

シュルツ演説の意義について「米政府はアジア政策でレンズ交換を行った」との批評が出ている。（83年4月21日付「ファー・イースタン・エコノミック・レビュー」誌）すなわち、これまでの米国のアジア外交は「米、中、ソ三極構造」というキッシンジャー流の戦略的な〝広角レンズ〟を通して眺めたアジア観を中心にして、組み立てられていた。だが、シュルツ長官は東アジアの自由諸国を中心とする経済ダイナミズムを重視し、これを中心にアジア・太平洋地域を見直すという　ズーム・レンズ　への切り替えを行ったというわけである。

シュルツ演説が「米、中、ソ、三極構造」に否定的なのは、米中国交樹立に触れた箇所で「ここ数年、アジア、太平洋地域を特色づける劇的な変化があるとすれば、恐らくそれは建設的な一勢力としての中国の台頭する役割である。しかし、これは同地域の成功における重要な要因のほんの一つに過ぎない」と述べ、中国の役割をごく控え目に評価していることでも明らかである。

ニクソン、キッシンジャー時代には、中国の役割を形容するのに「グローバル」とか「戦略的」とかいった形容詞が使われた。だがシュルツ演説は「中国はカンボジアその他でのベトナムの侵略と戦う努力で建設的な地域的役割を探究しはじめている」と述べている。中国はまだ貧しく、その安全保障面での発想はグローバルであっても、実力は地域勢力にすぎない、と見ているわけである。

一方、シュルツ演説は「日本の重みが増せば増すほどその責任も大きくなる」として、貿易問題、対外援助などで日本にグローバルな視点を求めている。要するに、シュルツ演説は「中国は実力で地域勢力、発想法ではグローバル・パワー、日本は実力でグローバル・パワー、発想法では地域勢力」と見なしているわけである。

次いでシュルツ国務長官は、84年7月18日、ホノルルでの「外交問題評議

会」での演説で「未来を理解するには太平洋を理解しなければならない」と述べた。次いで同年10月19日のロサンゼルスでの「世界問題評議会」での演説で、同長官は米政府が日本、韓国、中国、東南アジア諸国連合（ASEAN）加盟諸国を含めた「太平洋共同体」の創設を長期的な米外交の目標としていることを明らかにした。

また83年６月、ハーバード大学国際センター25周年記念セミナーで、ブレジンスキー氏（カーター大統領の国家安全保障担当補佐官）は「米国の外交の重心は欧州から日本を中心とする太平洋に移行した」と報告した。

５．自信失った西欧、台頭する東アジア

最も明快に米外交の重点が欧州から東アジアへと転換した背景を説明したのが、イーグルバーガー国務次官（84年３月１日辞任）だった。同次官は84年３月７日に国務省で、全米新聞協会向けに「太平洋関係の長期展望」と題する演説を行った。また同次官は同年１月31日のジョン・デービス・ロッジ国際センター主催の会議での演説でも東アジア問題について演説している。両演説の要旨は以下の通りである。

（１）米国の開拓は1819年に西海岸に達したが、第１回国勢調査以降ずっと人口統計上の中心は西部に移っており、この傾向はこれからも続いてゆくだろう。それとともに政治の重心も西部に移っている。

（２）東アジアの経済は世界で最も繁栄した部類に入る。日本の自動車、鉄鋼、電子製品は世界中どこでも販売されている。ASEAN、韓国、台湾、香港の躍動的な市場経済は、世界市場で十分競争できる価格で上質の品を作り出している。

（３）1979年以降アメリカと環太平洋地域との貿易は対西欧貿易を上回っている。さらに日米両国だけで世界のGNP（国民総生産）の約３分の１を占めている。昨年、日本はカナダに次ぐ第２の米製品の輸入国だった。

（４）西欧はその将来についての確信が弱いものになり、世界全体に目を向ける姿勢が薄らいでいる。これに加えて、若い世代にはこれまで北大西洋

同盟の根幹をなしてきた制度や手段について、その有用性に疑問を抱くものが多くなっている。

（５）西欧はますます内向的となり、自分だけの問題、自分のところの経済的困難のことしか考えないようになって、国際安全保障上の利益について話し合うにも、アメリカと足並みが合わなくなっている。

（６）今や重心が移動して、アメリカの外交政策上の意図は太平洋に向いている。日本は世界経済で重要な役割を果たすようになっている。

（７）アメリカと日本は、少なくともごく近い将来、先端技術の分野で最も重要な役割を果たす存在になりつつある。両国は技術開発の面で二大競争者になるか、それとも最も重要な協力者になるかのいずれかであることは必至である。

（８）おそらく西欧は技術開発競争で遅れをとるばかりであろう。国際経済からいえば、未来はまさしく先端技術の分野にある。従って、われわれは西欧から遠ざかっていく傾向にあるという問題と、少なくとも経済的に強力になってゆく日本、それにアジア諸国ならびに環太平洋地域全体とのますます複雑な関係をどう処理するかという問題に直面している。そしてわれわれの関心は、ますます太平洋に引き寄せられ、日本との競争か、それとも協力かという問題を何とか処理していく方向に引き寄せられるだろう。

イーグルバーガー次官の発言の意味は何だろうか。スペングラーは西欧の没落を予言した。今や西欧諸国は活力を失い、ハイテクでも米国、日本についていけなくなり、次第に内向きになりつつある。没落する西欧との対比で台頭する東アジアへと、米外交の重心が移りつつあるというわけである。

６．日本は先端技術と太平洋戦略のカナメ

以上、米政府当局者などの発言から、アジア・太平洋地域特に東アジアが世界から重視されるに至った原因を次のように集約することができよう。

①世界経済の重心が大西洋圏から太平洋圏に移りつつあること。特に東アジア自由圏の経済ダイナミズムは、今世紀末の全期間を通じて、ますます世

界的な重要性を増しつつある。

②情報大衆化時代を迎えてのアジア・太平洋地域の交通、通信面での重要性。

③東アジア自由諸国の経済成長率はずば抜けて高く、その豊かな人材、天然資源、将来の市場性などから見て、東アジアは長期不況に悩む米・欧諸国を蘇生させ得る大きな潜在力を持っていること。

④その多様性にもかかわらず、ASEAN 諸国に見られるように共産主義の脅威についての共通認識から、地域諸国の間に協力関係が高まりつつあること。

⑤アジア・太平洋圏の今後の発展のカギを握るのは、中国ではなく日本である。日本は単に米国のアジア・太平洋戦略の礎石であるばかりでなく、21世紀にかけて米国の世界戦略のカギでもある。

⑥先進的テクノロジーと工業基盤を持つ日本の経済力と技術力はハイテクと情報大衆化時代を迎え、米国との競合か協力かの選択の点で決定的な重要性を持っている。

⑦自由国際経済体制擁護の面での日本の重要性。米政府は世界経済回復のカギは自由貿易システムを維持発展させることだと考えている。この点、保護主義に傾斜する EC 諸国よりも、日本は自由貿易維持の面で米国の同盟者と見なされている。

⑧経済、技術両面での日米の協力関係の密接化は、内向的な西欧諸国に刺激を与え、NATO（北大西洋条約機構）と日米安保体制を含む西側同盟全体の活性化に寄与するとの期待。

⑨大陸中国の動向が世界の政治、軍事、経済面に及ぼす影響力の大きさ。

⑩シベリヤとベトナムでの軍事基地強化によって太平洋国家として台頭してきたソ連の脅威を封じ込める上での日本の戦略的、地政学的地位の重要性。

日本の戦略面での重要性は、地政学的に見て第１に日本が米軍事力をいつでもユーラシア大陸周辺部に急展開できる米国の前進基地の役割を果たしていること。第２にソ連の太平洋艦隊を日本海に封じ込める上で、日本の三海峡が極めて重要な戦略的位置を占めていることである。

また、ソ連は兵力、兵器の点で米国に対し伝統的に量的優位を占めている。これを米国が相殺する唯一の方法は、米軍兵器システムの質的優位の達成である。この点、米国防総省は先端技術の発達した日本との技術協力に大きな期待を寄せている。さらに戦略防衛構想（SDI）での日本の協力に米政府は強い期待を寄せている。

7．西へ西へと移動する人類文明

以上の諸点に加えて認識しなければならないのは、全世界的な注目を浴びている東アジアの経済ダイナミズムの中心が、日本、韓国、台湾、シンガポールなどの儒教文化圏に属する国々であることである。そして儒教圏諸国の平均的な特色として、子弟の教育への熱心さと、家族主義、勤勉さ、社会モラルの高さなどが挙げられよう。そして、冒頭に述べたように、ソルジェニーツィン氏が定住地の米国からの初の外国訪問先として、日本と中華民国を訪れたのは、両国が米欧諸国が失ったこれらの特色をまだ十分に残している儒教文化圏であり、行き詰まった西欧民主主義活性化のカギを両国で探究しようとしたためとみられる。その意味で、東アジアは西欧民主主義の活路を指し示す地としても大きな意味を持っているといえよう。

ところで、人類文明は西へ西へと移動してきた。揚子江、ガンジス川、チグリス・ユーフラテス川、ナイル川など河川の流域で発達した人類の文明は、ギリシア・ローマを中心に地中海文明を形成した。次いでアルプス山脈を越えて、地中海文明はヨーロッパへと広がり、ヨーロッパ文明が誕生した。ヨーロッパ文明は大西洋を越えてアメリカ新大陸へと渡り、同地で育った文明と一つになって「大西洋文明」が生まれた。

だが、現在の「大西洋文明」は既にらん熟期を終えて衰退期に入りつつあるようだ。例えば、アメリカの現状である。アメリカの民主主義は道徳の退廃、凶悪犯罪の頻発、麻薬の広がり、家庭や教育の崩壊などによって「病める民主主義」となっている。自由主義、個人主義の徹底化、社会の複雑化とともに価値観が多様化し、何が善か何が悪か、何が正義か、何が邪悪か、の

区別が定かでなくなりつつある。例えば早朝からテレビ番組で近親相姦の是非が論じられるという状態である。そして「病める西欧民主主義」の象徴が奇病エイズの発生である。エイズは米国に次いで、フランス、西独の順で発生率が高い。こうして「西欧民主主義」は「エイズ民主主義」に、「大西洋文明」は「エイズ文明」ともいうべき世紀末的現象を呈するに至っている。だからこそ、ソルジェニーツィン氏は来日に際して「私は共産主義の危険よりは、全般的な西側の退廃の方をより危険に思う。共産主義自体は、世界である程度の限界にまで達したら、それ以上は浸透する力はないからだ」と述べたのである。

8.「エイズ民主主義」——大西洋文明の退廃

そして、ソルジェニーツィン氏は西欧民主主義の病状として次の諸点を挙げている。(1978年6月8日のハーバード大学演説より)

①法律万能の社会=「西欧社会は法律の条文を基礎とした社会を作り上げた。何が正しいかは、法律の体系によって決定される。法律的に正しければ、それ以上のことは一切要求されない。こうして人間の最も気高い衝動が麻痺し、道徳的に見て凡庸の風潮が支配するようになった。」

②自由の濫用と商業主義=「善行の自由よりも悪行の自由が栄えるという状態となっている。西側では破壊的かつ無制限な自由が際限なく与えられている。ポルノや犯罪や恐怖を売りものとする映画なども、自由の一部をなすものと考えられている。」

③福祉国家の行き過ぎ=「西側の近代国家が生まれたとき、政府は人間に奉仕するためのものであり、人間には幸福追求の自由があるとの原則が宣言された。こうして福祉国家の出現を見た。しかし、その間道義的にかえって低下した。若者たちは幸福、金銭、余暇の所有に導かれ、ほとんど無制限の自由を享受している。人々はこの結構な人生を、共通の価値を守るために危険にさらすだろうか。生物学でさえ、不断の極度の安全や幸福は生体に良い影響を与えないことを教えている。」

そして、ソルジェニーツィン氏は西欧民主主義が「エイズ民主主義」へ退廃するに至った根本原因として、以下のようにヒューマニズム（人本主義）を挙げている。(ハーバード大学演説)

「間違いの根本は、過去数世紀における人間の思考の基礎そのものにあった。私は、西側で支配的に優勢な世界観——初めルネッサンスの時代に生まれ、啓蒙思想の時代から政治に取り入れられるに至った世界観のことを言っているのだ。この誤った世界観が政治や社会科学の基礎となり、人間より上位のものからの人間の自主性を宣言し、強制するいわゆる理性的ヒューマニズム（人本主義ないし人間至上主義）あるいは人間的自主性なるものを生み出した。それは人間中心主義と呼んでもよく、人間を存在するすべてのものの中心と見る考え方である。」

人間以上の存在を否定した「神なきヒューマニズム」は、人間をあがめ、その物質的必要をあがめるという唯物的、利己的傾向を西欧の民主主義社会に定着させてしまった。ドストエフスキーの作品『カラマゾフの兄弟』の中に「神の実在を認めない限り、この世に善、悪の観念は存在し得ず、人間はなんでもできる筈だ」との言葉があった。しかし、創造主としての神の実在を認め、人間が神の被造物であるという前提に立てば、現在の西欧民主主義に見られるような無制限な自由はあり得ない。この世に物理的法則があるように、精神的法則があるはずである。すなわち、絶対的存在である神の創造目的に合致した精神的法則、言い換えれば絶対的な道徳基準に自らの意思によって従う——これが本来の自由の意味でなければならない。

9. 人本主義で共産主義と民主主義は同根

では共産主義はどうだろうか。

ソルジェニーツィン氏は物質主義という点で、現在の人本主義的民主主義は共産主義と同じ基盤に立っている、と次のように指摘している。(ハーバード大学演説)

「マルクスは1844年に『共産主義はヒューマニズムの一種だ』と言った。

人は精神抜きのヒューマニズムと、あらゆる型の社会主義の基礎に、同じ礎石を見いだす。すなわち、あくなき物質主義、宗教や宗教的責任からの解放、見せかけの科学的アプローチなどがそれである。（中略）今日の西側と今日の東側の思考や生活様式には共通の特徴がある。これは物質主義からきているので当たり前のことである。（中略）既に久しきにわたって進行している一つの災厄がある。私は精神抜きの、無宗教の人間至上主義的意識がもたらす惨禍のことを言っているのだ。このような意識にとっては、人間こそがこの世のすべてのことを判断し、評価する基準なのだ。自惚れ、自己利益、嫉妬、虚栄、そのほか何十もの欠点から決して解き放たれてはいないこの人間をである。」

東の共産主義は無神論であるが故に、一方、西の民主主義は「神なき資本主義」であるが故に、いずれも絶対的な価値基準を欠いている。このために米ソの両体制で崩壊現象がともに起こりつつあるというわけである。そして、ソルジェニーツィン氏はハーバード大学演説の結びの言葉の中で人類への問いかけとして「われわれは不可避的に人生や人間社会というものの基本定義を改めざるを得ないのだ。人間はすべてのものの上にあるのは本当か。人間の上に、人間よりもっと優れた精神的存在（神）は存在しないのか。（中略）世界は、終わりに近づいているといえないだろうか。確かに歴史上、重要な転換点――中世からルネッサンスへの転換にも匹敵する重要な転換点――に近づいている。それは、われわれに、怒濤のような精神的昂揚を要求することになろうが、われわれとしては、かつてなかった高いビジョンとかつてなかった高水準の人生に向かって立ち上がらなければならない。この上昇は、人類の次の段階への登攀を意味することになろう。生ある者にとっては上に上がって行く以外に道はないのだ」と述べている。

10. 物質主義と強権主義――「覇道の文化」

こうして、ソルジェニーツィン氏は人類の新しい希望の地として東アジアを訪れたのである。同氏が最初の訪問地、日本で特に強調した点は以下の諸

点であった。

①日本では堅固な家庭と教育が国民の健全な発展の基礎となっている。

②外部世界が学ぶべき日本人の特質は、欧米人のように法律万能の風潮がなく、自己抑制の能力があることだ。

③日本人は激しく西洋文明の摂取に努めると同時に、民族的特性の維持にも熱心である。

④真・善・美が全世界的な三原則だが、日本は美的な尺度を受け入れる典型的な国である。

⑤西洋文明はキリスト教主義から出発したが、今やその精神が滅び、形式だけとなった。今や西欧文明の流れの主体は俗悪性と快楽となっているが、日本人はこの危険に頑強に抵抗している。日本文化は民族的伝統や価値観を保持し、道徳面を強調している。

以上のソルジェニーツィン氏の言葉は人本主義的かつ唯物的な「大西洋文明」への幻滅と、その裏返しとしての、道徳や精神面重視の「東アジア文明」への期待を示すものだといえよう。

ところで「大西洋文明」の下での現在の米欧型生活原理は、ソルジェニーツィン氏の指摘するように人本主義、つまりヒューマニズムを根幹とする価値体系である。そして、この価値体系は人間を越えた存在（神）を認めないが故に、自我のあくなき拡大と、物質的欲望の充足を求める。要するにエゴイズムと物質万能主義である。そこから米欧社会を中心に過度の消費文化を生み、次いで深刻な環境問題を引き起こすとともに天然資源を急速に枯渇させた。また国家エゴの拡大は核戦争の危険を生み出した。

ところで、資本主義も共産主義も、ソルジェニーツィン氏が指摘するように、人間至上主義、あくなき物質主義という点で共通根から出たものといえる。すなわち資本主義は物量の大量生産と大量消費を可能にするシステムとして、人間の自由に重点をおいた民主体制をつくり上げた。一方、失敗したとはいえ、共産主義も物量の効率的かつ組織的生産機構と富の公正な分配に重点をおいた全体主義体制を敷いた。重点のおき方こそ異なるが、ともに科学技術の力によって大量生産、大量消費の機構づくりを目指したものであっ

た。だが、人間至上主義と科学技術への過度の依存、そして、無制限な人間の欲望充足を求めようとする「神なき資本主義」も弁証法的唯物論に立った共産主義もあくなき自己拡大のための功利主義と強権主義に結び付くものであり、いうなれば「覇道の文化」である。

11. 仁義道徳中心――「王道の文化」

孫文は1924年11月神戸で行った「大アジア主義」と題する講演の中で次のように指摘している。

「東方の文化は王道であり、西方の文化は覇道である。王道を語るのは仁義道徳を主張することであり、覇道を語るのは功利と強権を主張することである。」

そして孫文は「仁義道徳」については「正義と公理によって人を感化させること」、「功利と強権」については「鉄砲と大砲を使って人を圧迫すること」と説明している。また「王道」について孫文は「自然に従うこと」と述べている。「自然に従う」とは「天に順う」であり、「徳」の原理に立つことであろう。

さて、国際政治における「王道」とはどのようなものだろうか。その一例として、1980年８月に台北市で開かれた「第10回世界平和に関する国際会議」で、中華戦略学会副会長の蔣緯國氏は、キッシンジャー流のマキャベリズム的勢力均衡論を中心とするゲオ・ポリティックス（地政学中心の政治）を批判し、次のように述べた。

「物質文明の西側諸国には、人類文化の最高目標を追求する哲学的背景が欠如しているため、究極的な目的観に欠けている。敵の本質を知らず、あるいは考慮しない状況にいるので、自己の確固たる立場がないのみならず、彼我の区別さえもつかないでいる。だから政治においても視野の広い構想に欠けている。」

蔣緯國氏の報告は、一言でいえば、キッシンジャー流の没道義的なマキャベリズム戦略を批判し、これに代わるものとして東洋的な〝道義の力〟を中

心とする戦略の必要性を強調したものである。すなわち同氏によれば、キッシンジャー時代の米国の外交理念とされる「現実主義」とは「原則と正義に背を向け、共産主義国家の野心をなだめるための敵への限りない宥和政策にほかならない」というわけである。しかも没理念の「現実主義」は、米国を苦境に陥れた今日のソ連の核戦力の強化を招いた70年代のカーター政権による米ソデタント政策がその良い例であった。また「力の均衡政策」について蔣緯国氏は「進んで主導権を放棄し、恐怖に包まれて戦争を忌避し、あげくの果ては、他の諸国の苦しみや崩壊という代価を支払ってまでして、つかの間の幻想的平和を買い取ることになろう」と述べている。カーター政権による中華民国の切り捨てを言ったのである。

力の均衡政策に代わる「道義中心の戦略」は、いうなれば孫文の「王道」の伝統を引き継いだものであり、正義のない唯物的な戦略論では、人類が救われないことをいずれも強調したものといえよう。

12. 人間を超えたものへの随順

欧米での唯一の例外として「王道」に基づく対外政策を現在展開しているのが、レーガン米大統領である。キッシンジャー流の没道義的なゲオ・ポリティックスは、米国の対外信用を失墜させた。その結果、第２次世界大戦後の「対ソ封じ込め政策」の根幹をなす、米国の同盟諸国に対する防衛誓約履行の決意を疑わせるに至った。その反省から、レーガン大統領のイデオ・ポリティックス（イデオロギー重視の政治）とレリジオ・ポリティックス（宗教重視の政治）が誕生したのである。

こうして同大統領は「自由の権利は、人類の普遍的な権利である」(81.3.11)「自由の大義は神の大義」（共産主義と戦い、人々の自由のために尽くすことは、神に尽くすことである）(83.7.30) と述べ、ソ連を「悪の帝国」と見なし、モスクワとのマキャベリズム的な取引を拒否するイデオロギー的、宗教的信念に基づく対外政策を展開したのである。このことは、国内政治の面でレーガン大統領がアメリカ民主主義の現状を危機的状態にあると見て、「道

徳倫理の基礎は宗教である。神なしには道徳は生まれず、社会はすさみ、民主主義は永続できない」と述べ(84.8.23)、政治と宗教の不可分性を説いたことと合わせて極めて興味深い。王道（道徳）抜きの政治、すなわち覇道政治からの離脱を試みている初の西側の政治指導者として特筆されよう。「王道」はアメリカ政治で例外的ではあるが、花を咲かせたのである。

さて「王道」すなわち「天」または「徳」に従うという思想は、伝統的な東洋思想の典型的なものである。その発想の根底にあるのは、「小我」を捨て「大我」に生きようとする思想であり、人間を超えたものへの随順である。「覇道文化」の「自己拡大」に対する「王道文化」の「自己没却」である。そして東洋には「則天去私」という美しい言葉もある。

そして「自己没却」の根底にあるのは、西洋的な人間と自然の分離といった自然観ではなく、人間を自然の一部と見なす発想である。そして「自己拡大」ではなく、自然と人間や人間どうしの調和を求める。知性的、対立的、分析的手法を中心とした大西洋の「覇道文化」に対し、伝統的な東アジアの「王道文化」は、心情的、直観的手法によって自然や社会との調和を求めようとする。どこまでも個人主義で、法律（契約）中心の米欧社会に対し、儒教文化圏特に日本の社会では、コンセンサスと情を中心とする社会である。そこでは冷たい法律的な契約よりも、人と人との心情的触れ合い、家族的な結び付きが重視される。

もちろん、欧米風の近代化が進むとともに、日本を含めた東アジア諸国特に都市部に欧米風の「人命は地球よりも重し」といった個人主義や物質至上主義、科学万能主義、法律万能主義が広がっている。だが、それでもなおかつ東アジア儒教圏諸国では、地方を中心に人間も自然も一体と見る独特の自然観、親子、兄弟を一体と見る家族主義、人間を超えたものへの畏敬と感謝の心、謙虚、調和、中庸、長幼の序といった東洋的な道徳原理の伝統が根強く残っている。

13. 東西の長所を生かした太平洋文明へ

このことは、むしろ外国人の方からよく指摘されるところである。昨年8月ジュネーブで世界平和教授アカデミー主催の「ソ連帝国崩壊」に関する国際シンポジウムが開かれた。その際、ソルジェニーツィンの研究者で、ロシアからの亡命者であるウラジスラフ・クラスノフ氏（米カリフォルニア州モンテレー国際関係研究所教授）は「民主主義は東アジアの儒教文化圏の日本で初めて見事な花を咲かせた」と強調した。

同氏によると、米欧の民主主義は「神なき資本主義」すなわち道徳的価値基準を失ったものとなり、「欲望民主主義」「利己主義民主主義」「物質万能民主主義」へと堕落した。

これに対し日本人は、欧米から輸入した「神なき民主主義」を、人間を超えたものへの畏敬の精神や家族主義、義理、人情といった日本の伝統的文化によって、「道徳基準を持った民主主義」へと見事に開花させたというわけである。

こうして、クラスノフ氏は「日本の民主主義が世界に示したのは、民主主義は民主主義の伝統がなくとも有効に働き得るということだ」と指摘した。それと同時に、同氏は「ソ連帝国崩壊後のロシアには、国内のすべての民族を結び付けるような新しい国民融和の民主主義社会を打ちたてたい」との希望を述べた。

以上の点から、日本を含めた東アジアは、いろいろな面で今後の世界の希望の星だといえよう。すなわち、21世紀に予想される次の文明は、太平洋を渡った「大西洋文明」と日本、韓国などを中心とする「東アジア文明」との適切な融和によって、両者の長所を活かしたより高次元の「太平洋文明」ではないかと予想される。そして「太平洋文明」では、科学技術を発展させ、今日の物質的繁栄を人類にもたらした「大西洋文明」の分析的思考と、豊かな精神文化を生んだ「東アジア文明」の調和と天道への随順の思考とが一体化し、物心両面で人類をよりバランスのとれた高次元の文明へ導くものと期

待されよう。

そして、このような「太平洋文明」こそ、米欧の病める民主主義を救うとともに、誤まれる知的偏重主義ともいうべきマルクス主義イデオロギーの克服の面でも決定的な役割を果たし得るのではないかと期待される。

14. 東アジアの摂理史的役割

レーガン政権をはじめとして、米欧の有識者たちが強い期待のまなざしを東アジアに注いでいるのもこのような背景からであろう。だからこそ、東アジアが持つ摂理史的役割について、統一教会の創始者、文鮮明師は、85年10月15日、ニューヨークでの「天勝日」記念講演の中で、いみじくも要旨を次のように述べたのであろう。

「歴史はここにおいて転換するという事実を知らなければなりません。イエスが死なないでその時にイエスを中心として12支派が一つになったなら、今のアラブ圏がその時に統一され、アラブ圏が統一されれば自然にローマ帝国と対するようになるので、必ずアラブ圏自体は、インド文明圏と中国文明圏が連結された基準の上で、アラブ圏を中心として、中国の宗教、あるいはインド宗教の新しいものと世界的な文化圏を形成して、ローマを吸収することが本来のみ旨であったのに、これが逆にローマに入って、迫害の道を、逆の道を歩んで、蕩減の道を経ながら、今アメリカの文化まで来て、アジアに転ずるようになったのです。」

「終末となったので、今西欧文明の若者たちがアジア文明にあこがれるのも、それはなぜかというと、摂理的意義から、このような転換において相合わなければならない時点を見つめる歴史的方向があるために、必須としてこのようにならなければならないのです。それで日本という国はどうしてあのようになっているかといえば、アジアの文明圏をもって連結されている島国であるから、これがセンターとなっているので、ここに一つとなって、アジアへ連結されるこのような時代となっていくのです。」

15. 日韓の責任分担とは

こうして、東アジア時代を担う柱の一つである日本の責任はとりわけ大きい。日本が東アジアで担うべき役割は何だろうか。わが国は、伝統的な日本的価値観との調和を図りつつ、他の東アジア諸国に先がけ物質面で米欧流の近代化を成功させた特異な国である。従って東アジアでの日本の責任分担は次の４点であろう。

①日本の近代化のノウハウを他のアジア諸国に提供し、近代化を支援する②自らの防衛責任を果たすとともに、他の東アジア諸国自身の自衛力強化への要請に寄与する③経済面で東アジア経済発展のための共同シナリオ作成に参加する④文化交流を深め、東アジア諸国の多様性を尊重しつつ、相互理解を基礎とした協力関係を深める。

そして、日本がこのような役割を果たすための前提となるのは、日本自身がまず東アジアの中心国家としての責任を自覚することであろう。

この点について、文鮮明師は85年12月12日、ソウルの「リトル・エンジェルス芸術学校」での講演で、日本について①過去の侵略国家としての烙（らく）印やエコノミック・アニマルの汚名を克服することが必要であり、アジアが連合して、一つのブロックを形成するに当たり、これと共同歩調をとるべきである。②世界のために自国を超えて、世界を救済しようとする人づくりが緊急事業である。③このような思想は永遠なる絶対的価値基準を中心とすることなくして不可能である——と指摘した。

また、文鮮明師は同年12月11日のソウルのヒルトン・ホテルで開かれた「文師勝利帰国歓迎晩餐会」で韓国の進むべき道について次のように述べた。

「宇宙の存在秩序の根元は、〝為に生きる〟ことです。韓民族の試練は摂理的なものであり、韓民族単独ではなく、世界との関連の下でのみ解決が可能なのです。韓民族は神が世界の精神界を指導する目的を持って送られた方に従って、苦難を超えていかなければなりません。韓民族が世界のために生きるとき初めて神の韓国に対する祝福が結実されるでしょう。」

東アジア共同体結成のための第一歩は、儒教文化圏の中核であり、さらに戦略的、政治的、経済的に決定的に重要な地位を占める日韓両国の真の協力関係の樹立である。その上で、中国、東南アジア諸国を含めた東アジア諸国との連合へと進むのが合理的であろう。

文鮮明師の演説は、日本人に「為に生きる」東アジアの中心国家としての国際的責任への自覚を促すとともに、韓国民には心を大きく外界に開き、民族主義を超えた世界的、摂理史的視野を持つように訴えたものと理解されよう。

16. 神中心の基本的価値観確立を

文鮮明師は前記の「天勝日」講演の中で次のように指摘している。

「サタンはアメリカと日本が一つになることに反対し、アジアへ連結されることも反対するのです。」

「神はアジアと西欧文明を一つに結ぼうとするのに、サタンが立ちふさがって破綻させようとするので、レバレンド・ムーンがこれを中心として、アジアの文明の核をアメリカに持ってきて、分立されたここで、基盤をつくって、再び接木しなければなりません。今は、韓国と日本のみが共産圏内になっていないのです。ほとんどが共産圏の脅威を受けています。ただ韓国と日本だけが影響を受けていないので、韓国と日本と、アメリカを連結するための闘いをしている事実を知らなければなりません。それで、いかにして中共を引き入れるか、中共が神の前に帰ることができるか。そのために、ハイウェイ・システムを宣布して祈祷してきたことが、今は帰りつつあるという事実は、希望の歴史の時代の門が開かれている事実を、皆さんは知らなければなりません。」

「歴史は既に、世界とアジアの文明圏と西欧文明圏の思潮が交差する時に入ってきているのです。西欧文明の主導権は過ぎて、アジアの新しい神を中心とした、統一圏文化時代へと移っているのを、この世のだれも知らないのです。」

文鮮明師のこの指摘は、やがて訪れるのが「太平洋文明の時代」であり、21世紀がその中心柱となる「東アジアの世紀」であることを示唆したものと理解されよう。だからこそ、今後のソ連の日米、韓米、日韓分断工作が活発化することが予想されるのである。

いずれにせよ、これまでのようにアジアが欧米に従属する形の「世界の中のアジア」ではなく、アジアが政治、経済、文化的なダイナミズムの中心となり欧米やソ連をも引っぱっていく時代、まさに「アジアの中の世界」ともいえる時代がやがて訪れようとしている。

そして東アジアを中心に、これまで人類を支配した西洋文明に代わる新しい「統一文明」すなわち「太平洋文明」への道のりが敷かれようとしている。

そこでこれからの日本には、文鮮明師の演説にあったように「世界的な思想で国家を超越して世界の公益のために尽くす」という精神が必要である。「為に生きる」精神である。そしてそのための基本的な価値観は、宇宙の真理に基づくものでなければならない。すなわち、人類を含めた宇宙万物の創造主である神の存在を認めた神中心の絶対的な価値観である。そしてそれが同時に、人類を救済し得る「東アジア文明」ひいては来るべき「太平洋文明」の基本的価値観ともなり得るのである。

日・韓・英語の同時通訳によって盛り上がる全体会議